阿部けいしが政治家として何をしたいか

兵庫県第2選挙区支部長として国政に挑戦予定の、阿部けいしさんにインタビューしました。

聞き手:医師、厚労省、世界保健機関(WHO)、民間企業など多彩なキャリアを持ち、在宅医療の現場にも立っていた阿部けいしさんに、政治を志す理由を伺っていきます。

阿部けいし:「危機に強い社会を作る」というのが、私が生涯心血を注ぎたい課題です。その原点は、二つの「3・11」、一つ目は2011年の東日本大震災、二つ目は2020年の新型コロナパンデミック宣言です。当事者として関わった2つの出来事が、私が国政を志すきっかけです。

震災で見た景色

阿部けいし:阪神淡路大震災の際、私はまだ小学生でしたが、その光景を覚えています。また私は宮城県生まれで、親戚が沿岸部に住んでいました。親戚に会った一週間後、津波がありました。2011年の震災直後、避難所を一つ一つ回って親戚を探して歩いて見た景色は、災害の多い日本で、多くの人々の暮らしを守りたいという、私の思いの原点になっています。

聞き手:その後、医師になり、厚生労働省へ。現場で感じた課題は?

阿部けいし:西アフリカのエボラ出血熱に現地で日本人が感染した際のオペレーションを構築したり、様々な感染症対策に従事しました。しかし政府職員が危機管理を学び高める環境が少なく、今の政府の状況では大規模な危機が到来すれば、また多くの命が失われるのではと危機感を感じました。

混乱を極める現場の最前線で見たコロナ

阿部けいし:2020年のパンデミック宣言時は、WHO本部でコロナ対応の渦中にいました。各国の危機対応の調整をする仕事です。日本政府とも話した際、コロナ関連の各法律も省庁も複雑に入り組み、危機対応にあたる方々への教育訓練もない、日本の現状に大きな課題を感じました。

聞き手:そんな阿部けいしさんが、政治を志す理由は何ですか?

阿部けいし:一つは「危機に強い社会」を作ることです。日本は歴史的に、自然災害や事故、感染症など発生した危機に応じて個別に法律を整備するという方策をとってきました。その結果、対応がそれぞれ異なり、応用が効かない。これから日本が、南海トラフ地震、首都直下地震、台湾有事、パンデミック等、多様な国家的危機に直面することが予測される中で、一人でも多くの国民を守る社会を作ることに、私も全力を尽くしたいと思います。

また私は、医師として在宅医療の現場でも働いてきました。現場で見てきた経験を活かして、地域で安心して暮らし、年を重ねられる社会づくりも実現していきます。